

## 『初期習作集』(Juventia)の意味

塩谷清人

ジェイン・オースティンは十二歳頃の若い時から、ノートに走り書き程度の短篇(断片と言った方が適切かも知れない)から少し長いもの、時には一万語を越える中篇に近いものまでを書き記していた。それを十七、八歳位まで続けた。オースティンが本格的な長篇小説を執筆し始めたのは、一七九五年、つまり二十歳頃と推定されているから、十代の習作はそれに先行する創作行為として注目される。この中には、短篇小説だけでなく、彼女の思想を知る上で参考になる「英国史」や詩なども入っているが、この小論では短篇に絞って論を進める。

そのノートは三冊あって、およそ九万語に達する。幸いオクスフォード大学のボドリアンに第一巻が、後の二巻が大英博物館に残っている。オースティンの原稿は最後の『サンデイトン』などごくわずかしか残されていないから、これは貴重なことである。

五年前、「ワールド・クラシックス」版の『キャサリンと他の作品』(Catherine and Other Writings, 1993)が出されたが、それはこのノートを詳細に検討して校訂したものであった。それまで、オースティン学者チャップ

マン (R.W.Chapman) の全集版の第六巻『小作品集』(*Minor Works*) が一番信頼の置ける版であったが、今度の版はそれよりもさらにしつかりした校訂版になっている。ありがたいことに、この版の校注には細かなノートの書き込み、修正まで載っていて、何度も書き直すというオースティンの特徴が若い頃からの習性であることを確認できると同時に、この書き直し作業が二十年近く経った一八〇九年に、チョートンに移ってからもなされたことも知る。『初期習作集』のノートを甥や姪と一緒に、三十歳を過ぎたオースティンが見直しているという事実は驚くべきことだ。ある意味では、オースティンという作家の素顔のままの創作現場が見える。

これ自体もわれわれにとつてはうれしいことなのだが、さらにこの校訂、編者の一人で、サミュエル・リチャードソンやフランシス・バーニー研究で有名なマーガレット・アン・ドゥーデー (*Margaret Anne Doody*) が、この本の序に大層示唆的な初期短篇小説論を書いて、それがまた論議を呼ぶことになった。これまでのオースティン研究では、『初期習作集』は風刺的な要素が指摘されたり、後の六大小説に繋がる練習作として見るのが普通であった。それを自立したものとして考えなかった。要するにあまり重要視されていなかった。しかしドゥーデーなどの研究から、少し『初期習作集』に対する見方に変化が出てきた。そこでこの小論では、その辺の事情を視野に入れながら書くことにする。

六大小説に親しんだ読者は、オースティンの作品がかなり用意周到に計算されたロジカルな世界であることを知っている。様々な障害がありながら、微妙で複雑な因果、要因によって主人公たちは必然的に結婚のゴールに達する。しかし、『初期習作集』の世界はそのような論理性はほとんど無視される。男女の結びつきはかなり突

発的で、脈絡すらない場合が多い。ある日突然出会って、その日の内に結婚することもある(「恋と友情」)。もちろん当時では違法であるが、そんなことに頓着しない世界なのだ。登場人物は何の規制、しきたり、慣習も知らないかのように勝手にふるまう。突然知らない村へ行つて「あなたのお家と地所をください」(1)と要求する男(「イーヴリン」)。わざわざ姉の名前を題名にした「美しいカサンドラ」は、装身具店の娘が店の高価な商品の帽子を持ち出し、無銭飲食したり、無銭乗車してロンドン北部のハムステッドまで散歩をする話である。英文学通ならこれがリチャードソンのクラリサ・ハーローの逃走劇のパロディであることが分かる。また、兄や従姉妹の名を取つた「ヘンリーとイライザ」では子供が飢えをしのぐために母の指をかみ切るエピソードが出てくる。(2)これも文学的パロディである。従来の小説からの徹底した逸脱でもある。

このようなあつかひからかんとしたさかしまの世界を、ドゥーディはカルヴィーノ的、ボルヘス的世界と言っている。(3)別の言葉で言えば、バフチンの言うカーニヴァル的な世界である。様々な逆転があり、それが喜劇なのだ。犯罪や悪もあるが、不気味なほど明るい。オースティンはあらゆる価値観を無視して、笑いのめしている。その旺盛な笑いを求める精神はラブリーでもある。現実との関係が常に問題になる長篇小説の世界とはかなり違う。それを突き抜けた世界である。シュールリアリスティックにある異常な行為が突出している。登場する人物も正常な感覚の人間は少なくて、どこか偏っている。その表現も、ノンセンスの笑いが豊富である。「瓜二つ」の顔と言つたすぐ後で、「顔形、目の色、鼻の長さ、皮膚の色は違うけれど」(4)と書き、「レベッカは三十六歳、ロジャー大尉は六十三歳という若いカップル」(5)と書く(「フリーダとエルフリーダ」)。いささか単純なこの種の笑いは作者の若さを示す例だが、奔放で屈託がない。

ドゥーディは、オースティンの本来書きたかった小説はこの習作集のような解放感のある、自在な世界であると大胆な推測をしている。それが時代の変化によって、また、二度の出版拒否<sup>(6)</sup>に会って、「誰も自分の作品など求めていない」という失意になり、チョートンに落ち着いてから、読者の好みの変化に合わせ、読者の望む方向へ修正していった。その結果が現在残る六大小説だと主張する。<sup>(7)</sup>ドゥーディの主張のように、あたかも外的理由だけで、オースティンが『初期習作集』の書き方から転向したと考えるのは問題だろう。また、習作集と六大小説を、表面的な差異から対比的に見ることも問題がありそうだ。一見すると対蹠的な習作集だが、手法的にも長篇小説と共通する面がかなりある。人物のグロテスクなほどの省略した書き方、カリカチャーは未完の遺作『サンデイトン』に至るまで終生変わっていない。さらに内容的、テーマ的にも、この習作集の後半部分にすでに、小説に繋がる要素はかなり見える。例えば短篇の露骨なパロディ性についても、先行する作家を下敷きにして、それをパロディ化する姿勢は、露骨ではないが、長篇小説でも変わっていない。逆にオースティンがいかにアイロニカルな笑いを文学の中心に据えたかがこれによってよく分かる。

『初期習作集』は大きく分けて二つの特徴が指摘できる。一つは習作集に見られるが、長篇小説には見られない面、意図的な矛盾、非現実性や暴力や犯罪行為の頻出、さらに、性差の逆転、女性の解放感など(この点はオースティンの抑圧された心理とも関連して興味深い)。もう一つの特徴はそのような異質な世界と併存して、やはりオースティンの世界とでも言うべき共通性の面である。痛烈な現実批判をしながら、重い現実社会を意識して、それとの調和を模索する顔がすでに習作集にも見られる。そのどちらを強調するかによって、この『初期習作集』

の位置付けはかなり違ってくる。

まず最初の特徴、長篇小説とは異質な面について少し具体的に説明して見よう。その代表例として、ここで「ジャックとアリス」(*Jack and Alice*)を取り上げて説明してみることとする。

「ジャックとアリス」は、第一巻の二番目に書かれており、わざわざ「小説」という副題がついていることからも分かるように、この巻の中では一番長い話になっている。すぐ上の兄フランクへの献辞や本文の内容などから一七八八年から九一年の間、つまりオースティンが十二歳から十五歳位の時と推定される。

兄妹が題名になっているから、当然主人公はこの二人だと読者は推測するかもしれないが、兄のジャックはわずかに十行足らずしか言及がなく、しかもすぐ死亡する。この話の中心に位置するのは、チャールズ・アダムズという男である。彼は魅力的な資産家の若い男だが傲慢である。彼がリチャードソンの『サー・チャールズ・グラインディソン』の主人公のパロディであることはすぐ分かる。<sup>(8)</sup> 話の筋が複数の女性に好きになられる仕組みであるのも同様である。オースティンがこの小説を好きであったことは有名である。さらに彼女が好きなサミュエル・ジョンソンの言葉遣いもパロディ化されているという指摘<sup>(9)</sup>もある。つまり、彼女の初期の創作では、先行するあらゆる作品がパロディの対象になっている。クリッシェ(常套句)もわざとに多用される。

このような露骨なパロディ性以上に特徴的なのは、性差の無視、および逆転である。長篇小説では、ヒロインたちは当時のしきたり、慣習、規制、いわゆるマナーズに縛られ、それから解放されようと孤独な努力をしているように見える。最終的には(奇跡的に)それに成功しているのだが、やはり、社会の枠内で納まっている。ところが一般的な男と女の役割がこの「ジャックとアリス」や他の短篇では逆転している。積極的に自己主張する

女性が出てくる。当時は男性が女性に求婚するということが普通だが、ここでは女性が男性に求婚し追っかける。<sup>(10)</sup> さらにアリスは大酒のみで、賭事までする。当時の普通の女性なら避ける行為を平気でやつてのける。「レスリー・カースル」では、人命より食事を大事に思う女性が出てくる。オースティンはかなり大胆である。

チャールズを追っかけるもう一人の女がルーシィで、遠くウェールズでチャールズに会ったという仕立屋の娘。互いに遠く離れた土地の女二人が同じ男性を好きになり、出会うという偶然性。これはもはや現実の次元を越えている。そのことで言えば、習作集には、わざとに非現実的な地名が入っていたり、また、この短篇のように、イギリスにはない柑橘類が植えられていたりする。話の非現実性は一層強調されている。その一番の好例が別の女が嫉妬に狂ってルーシィを毒殺する話である。それが少しも暗い話にならない。彼女の死を悲しむのはそれまで彼女のことなど思い出しもなかったアリスだという。最後に、当時のプリンス・オヴ・ウェールズ(後のジョージ四世)に対する風刺<sup>(11)</sup>まで添えられている。ファース(笑劇)と言ってもいい内容である。

オースティンは「罪深いことや悲惨なことは別の人のペンに任せましょう。私はそのような題材からはできるだけ早く立ち去りたい」と『マンスフィールド・パーク』の終わり(第四八章)に書いた。暴力や犯罪は小説では意図的に切り落とした部分である。ところが、習作集には、「ジャックとアリス」のルーシィ毒殺の他、自殺、窃盗、秘密結婚、公然の裏切りなどしばしば描かれる。

短篇の異質性を別の言葉で言えば、十代中頃のオースティンは現実をよく見ていたが、それに足を取られることなく、自由に書くことができたのだ。習作集にも実に痛烈な現実批判がある。しかしオースティンが習作集で書きたかったことは、あらゆる意味での束縛をはずして楽しむことだったようだ。

「ジャックとアリス」は初期の短篇の代表例であるが、それから三、四年後に書かれた、オースティンが十六、七歳頃のものに「キャサリン、または四阿<sup>あやま</sup>」(Catharine, or the Bower)がある。習作集の中では後期にあたる。これを読むと、長篇との差異を強調しすぎるのは問題があることが分かる。オースティンは終生刻々と変化した作家である。

いくつかのポイントが指摘できるが、まず何よりも、六大小説にかなり近い設定になっている。狭い社会、村での孤独、友人の離散、身分差、女同士の微妙な駆け引きと若い男女の出会いと恋愛、舞踏会、世代の考えの違い、両親の不在と叔母による教育。つまり、長篇小説の世界が間近かに見えている。同じ『初期習作集』の中にもありながら、先に扱った「ジャックとアリス」的な突き抜けた超現実観はない。いろいろなマナーズが脇役によって示される。短篇の特徴が一番出ているのは、主人公キャサリンと相手役のエドワードがそのマナーズを無視して行動することである。

両親のいない若い娘の設定は、その冒頭の一句「彼女よりも前のヒロインがそうであつたように」と言うように、当時の女性作家がよく使う設定のパロディでもある。それは『ノーサンガー・アビー』の冒頭部分と似ている。また同名の主人公キャサリンとも似ている。さらに、その感受性の過剰さは『分別と多感』のマリアンとも似ている。キャサリンを夢中にさせるフランスのパリ帰りの伊達男エドワードは、ウィロビーといったところだ。身分意識の問題はオースティンが繰り返し扱うテーマだが、ここでもキャサリンの父が商人(これは「高慢と偏見」のエリザベスの伯父の職業)でダドリー家や従姉妹のカミラから蔑視される。それと教養やたしなみの問題。こ

れもオースティンが繰り返して書いているが、「もつと有用な知識と精神面の陶冶にこの年月を捧げるべきだった」とはカミラの表面だけの芸事、たしなみへの痛烈な批判である。後の『マンスフィールド・パーク』のバートラム姉妹への批判とも繋がる。

「キャサリン」で一番注目される人物が叔母のパーシヴァルである。彼女は現在がいかに精神的にも、倫理的にも墮落しているかを繰り返して言う。これは当時のフランス革命以後のジャコバン主義、民主主義化への保守派の危機感を表すものであり、さらに若いオースティン自身がすでに鋭い現実感覚、批判精神を持っていたことを示す好例だ。この短篇でパーシヴァルは繰り返した次のようなことを言う。

「お前は間違っているよ。国の繁栄というのはどの国でも個々人の美德にかかっているのだよ、誰でも礼儀、礼節にひどく反することをすれば、その国は没落するのだよ」<sup>(12)</sup>

これは、オースティンの後期の小説(『マンスフィールド・パーク』、『エマ』、『説得』)の世界の意識である。一八〇年代のオースティンは、これらの小説群で、『高慢と偏見』までと違って、かなり保守的な意識になっている。『マンスフィールド・パーク』の家庭演劇に対するオースティンの批判的な態度を思い出せばよい。

この点に関しては、フェミニストたちから反論が出ている。彼女たちはオースティンを革新的思想家に祭り上げたらしい。その代表的存在はクロードディア・ジョンソン(Claudia L. Johnson)である。パーシヴァルの考え方は批判すべきものとしてオースティンは書いていると、ジョンソンは言う。また、オースティンが保守的だという従来の一般的な考え方は捨てるべきだと言う。<sup>(13)</sup> ジャン・ファーガス(Jan Fergus)の言い方はもつと微妙である。彼女の説では、パーシヴァルの意見はこの「キャサリン」で批判されていて、「オースティンは、政治



的には基本的に保守シンバかも知れないが、精神的には批判的であり、見方もアイロニックである」と言う。(15) 批判的精神を持つているが政治的には保守という人は大勢いる。わざわざこんな持つて回つた言い方をする必要はない。それはともかく、「キャサリン」では、パーシヴァル叔母の極端に厳格な、守旧的、保守的な姿勢は批判されていることは確かだが、同様にエドワードの父で国会議員のスタンリーの現代礼賛も批判されている。いわば若い世代のキャサリンから見た大人の世界は否定されている。これは『初期習作集』に共通する姿勢であつて、善悪云々よりも、自由を渴望する若者からの意見である。「キャサリン」におけるパーシヴァル描写を見て、オースティンの革新性というのはいすぎであらう。

オースティンの精神基盤の核となつてゐるのは体制維持と体制内での変革だが、それを前後から挟むように解放と抑制の両極が存在する。前者が『初期習作集』では突出している。つまり、オースティン自身は当初からヤヌスの二面性を持つていたと見た方が分かりやすい。短篇に見える精神は、長篇小説の抑制の効いた、ある意味では大人びた精神ではない。彼女は年齢とともに抑制する姿勢が強くなつてゐる。しかし、遺作『サンデイトン』の世界は、潜在してゐた解放への気持ちがついに押さえ切れなくなつた吹き出物のように出てゐる。意外にも『サンデイトン』は『初期習作集』に近い世界なのだ。円環の終焉というべきだろうか。

確かに多くの点で、『初期習作集』には、後の長篇小説ではかなり隠蔽されてしまふ自由さ、奔放さがある。しかし、それは小説で完全に消されてゐるわけではない。サンドラ・ギルバート(Sandra M. Gilbert)たちが指摘する、「家から出られるならどんなことでもするという娘たち」<sup>(16)</sup> 例えば、『マンズフィールド・パーク』の出奔し、不倫するパートルラム姉妹は、『初期習作集』の女性群の延長上にある。閉塞的な状況にいて、エリザベス・

ベネットのようにハビー・エンディングを得るのは奇跡的なことである。

『初期習作集』には先行する作家たちへの痛烈な批判、パロディと敏感な時代意識、その時代に対する若い故に屈託のない批判精神がある。それを基盤にして、パターン化した文学性、現実の規則、マナーズを思いきって取りはずし、解放した世界が『初期習作集』である。一見した所、かなり異質な世界であり、破壊的要素が強いけれども、しかしそれは六大小説に繋がるものだ。

注

- (1) Jane Austen, *Catharine and Other Writings* (World's Classics, Oxford U.P. 1993), p.177.
- (2) *Ibid.*, p.35.
- (3) *Ibid.*, p.xxxvii.
- (4) *Ibid.*, p.3.
- (5) *Ibid.*, p.5.
- (6) 一七九七年一月にオースティンの父は出版者カドルに「第一印象」(「高慢と偏見」の原形)を出版依頼をしたが断られた。また一八〇二年春に「スーズン」(「ノーサンガー・アビー」の原形)の原稿をクロスビーに売ったが、出版されなかった。
- (7) *Ibid.*, p.xcxi. ドウーディは次の本に掲載された論文でも同題旨のことを書いている。cf. Margaret Anne Doody, 'The Short Fiction' in: *The Cambridge Companion to Jane Austen* (Cambridge U.P. 1997), pp.84-99.
- (8) グランディソンが太陽になぞらえられているが、同様のことがこの話のチャールズにも言われる。チャールズが「私は完璧な美男子であり……礼儀作法も最高に洗練されていて」などと言うのも、理想化されたグランディソンのパロディである。
- (9) *Ibid.*, p.291.

- (10) これも文学的には、「サー・チャールズ・グランディソン」のクレメンティーナがわざわざイタリアからグランディソンを追っかけてくる話のパロディとして読める。
- (11) *Ibid.*, p.26 and p.295.
- (12) *Ibid.*, p.222.
- (13) Claudia L. Johnson, *Jane Austen: Women, Politics and the Novel* (Chicago U.P., 1988), p.3.
- (14) Jan Fergus, *Jane Austen, A Literary Life* (St. Martin's Press, New York, 1991), p.67.
- (15) Sandra M. Gilbert & Susan Gubar, 'Shut Up In Prose: Gender and Genre in Austen's *Juvenilia* in Modern Critical Views' *Jane Austen* ed. by Harold Bloom (Chelsea House Publishers, New York, 1986), p.67.

(英米文学科 教授)